紹介

トムソン「支那に於ける人口動態統計調査の經驗」

An Experiment in the Registration of Vital Statistics in China by Warren S. Thompson (Oxford Ohio, U. S. A) 一九三七年巴里國際人口會議に於ける報告

支那の人口統計は世界人口統計の神秘境である。支那には人口靜態統計もなければ人口動態統計もない。人口總數に就ても各種の推測あるに留まり、正確なるものなく、推測は三億五千萬より五億五千萬に至る迄頗る開きの大きいものである。支那の人口數の問題は誠に重大な興味のある問題ではあるが。當分は到底推測の範圍を出づるを得まい。人口動態統計調査は之を全國的に行ふ事の困難は人口靜態統計以上ではあるが、動態統計は部分的の調査も亦全體の傾向を現はす點に於て價値がある。この意味に於て米國の人口學者トムソン氏の行つた支那の人口動態統計は小規模乍ら價値のあるものである。（尙支那に關する人口動態統計に就ては人口問題研究會發行「支那人口問題研究」一二八頁乃至一四四頁に各種の資料が掲げてある。）

一、調査方法

トムソン氏は一九二三年以來屢〻支那に行き、特に一九三〇年より一九三一年にかけて約半歲支那にあり、その主宰するスキップ財團の事業として本調査を行つたのである。本調査は南京大學の陳氏を主任とし、南京と上海との中間揚子江のデルタ地帶にある「小池」を調査地として選定した。小池を選定したのは、調査主任が一ケ月に一回位巡回出來る大きさなること、中部支那の代表的の地方なること、南京大學の附近にあつて調査主任陳氏と個人的に親しみのある事等を理由とする。小池は部落二百、戶數四千五百、人口二萬餘を有する地域である。

陳氏は一九三一年四月に居を小池に移し、四十戶乃至五十戶毎に一人づつの調査員を囑託し、一九三一年十二月一日より實際調査に着手し、三ケ年の調査の結果を纏めたものが本報告である。四年目の最初の部分も少しく參照されて居る。

二、調査の困難

本調査を實行するに當つて陳氏の遭遇した困難は吾々の想像の外にある。その第一は適當なる調査擔當者を得る事の困難であるが、一九三一年六月選任後第二回目の巡回の際に於て百四人の調査擔當者中出生、死亡、結婚等を完全に記錄し得るものは八人に過ぎなかつた。かゝる調査員の訓育の困難な事はいふ迄もない。しかしそれよりも驚くべくも興味のある事は人口調査に對する地方民の僻見及迷信である。或は幼兒の調査は幼兒の名前を橋の架設工事に際してその下に埋める爲であつて、そこに名前と年

齡とを埋められた子供はハシカで死んでしまふといふ樣な流言が行はれたり、又當事滿洲事變直後であつたから、政府が動員する爲に人口調査をするのだと云ふ噂が傳つたり、人頭稅の基礎になると云ふものもあつた。かゝる無智と迷信と流言とを克服して本調査がなし遂げられたのである。

三、人口構成

一九三二年三月一日現在の人口を以て調査の基礎としたが、その人口構成をみるに世帶數四、五七九、人口總數二二、八六四人である。その中には同居の被傭者も含んでゐる。家族の平均人員は同居の被傭者を除けば四・七人、被傭者を加へて四・八人で、これを貧富別にみると、

	被傭者を除く平均家族	被傭者を含む平均世帶	人口中の割合
富者	六・八	八・四	四・三
中產	五・七	五・八	二七・一
貧困	四・一	四・一	六八・六
計	四・七	四・八	一〇〇

こゝに富者とは只若干の食料の貯があるにすぎない程度のものであり、中產者とは生活に困らない程度のもので、貧者とは常に食物の不足勝のものである。如何に一般的に貧困であるかが解る。貧者に於ては被養者が少く、富者に於て被傭者の多いのは當然であるが、被傭者を除いたものでも尙富者の家族が多く、貧者が小家族であるのは、貧者にあつては小供が早く家をはなれて他鄕に行く事、親類緣者同居者の少い事及死亡率の高い爲で、出產率の差は後に述ぶる如く極めて少數で云ふに足らず、家族の少い原因にならない。

次に年齡別構成をみるに〇歲乃至四歲のものが總人口の一六%四であるに對し、十五歲乃至十九歲のものは殆んどその半數の八%九である。幼少にして死亡し又は鄕里をはなれる者の多い事が解る。

男女の比率は二〇歲迄及四十五歲乃至五十歲までは男の數が非常に大きい。これは女子を輕んじ殺したり賣つたりするためと想像される。出產率に於ては三年間の平均女一〇〇に對し男は一〇五・九で、西歐諸國と異るところはない。

四、出生率

出生率は人口千に付第一年目四八・三、二年目四四・一、三年目四〇、平均四四・二であつて、著者は世界何れにもみざる多產といつてゐる。更に之を年齡別有夫の婦人千人についてみるに、

一五——一九歲	二一・三	
二〇——二四	三三三・三	
二五——二九	三二八・〇	
三〇——三四	二六三・七	
三五——三九	二三〇・八	
四〇——四四	九一・二	

何れの年齡についてみるも西歐諸國の五割乃至十割高い。然も之等の出產數は調査洩ある事を想像しなければならないから、實際はこれより高くとも低い事はない。

本調査の出產率の一特質は左表の如く季節別に甚しい差異のある事である。四月乃至七月は出產率非常に低く、九月乃至一月は出產率高く、前者

は後者の二分の一乃至三分の一である。その理由は夏より初秋にかけて氣候酷熱、傳染病流行し受胎を防げるものと想像される。死亡率の高い月の九ケ月後に於て出産率が少い事も顯著に現れて居る。

月別死亡率及出産率

月別	死亡率 1930—32	死亡率 1932—33	月別	出産率 1932—33	出産率 1933—34
九月	37.9	44.7	六月	28.5	25.1
十月	45.6	59.2	七月	28.5	30.7
十一月	35.1	48.6	八月	45.6	45.2
十二月	30.2	24.6	九月	53.1	61.2
一月	30.7	31.8	十月	60.3	52.7
二月	31.3	47.5	十一月	62.0	44.7
三月	25.2	30.7	十二月	58.1	71.4
四月	32.9	21.2	一月	68.1	62.9
五月	25.8	20.1	二月	38.0	52.7
六月	23.6	15.6	三月	39.7	30.6
七月	76.3	31.8	四月	25.7	28.3
八月	118.6	57.5	五月	22.9	18.1

かゝる高率の出産率と雖も之に對し制限の努力が働いてゐないわけはない。年若き新妻の受胎を防止する習慣もあれば、再婚に對する僻見もあり、墮胎も少くないと報告されてゐる。墮胎を常習とする産婆もあると云ふ。

貧富別の出産率をみるに十五歳乃至四〇歳の有夫の女千人當りの率は左の如くである。

富者	二五五・七
中産	二七九・六
貧者	二四九・四

尤も調査の對象が餘りに少いからこれによつて一般化する事は困難である。

五、死亡率

人口千人當りの一般死亡率は左の如くである。

第一年	四二・七
第二年	三六・一
第三年	五二・〇

死亡率の高い事と、年によつて甚しく差のある事は驚くべき現象といはねばならぬ。かくの如き死亡率の高い事はチビス、マラリヤ、コレラ、赤痢等の傳染病の多い事並に食料の不足である。傳染病は夏より秋にかけて多く、その時期の死亡率の高い事は前掲の表に於て示した所である。

高率なる死亡率は之を幼兒死亡率に就てもみる事が出來る。第三年目に於ける幼兒死亡率は一歳以下の生兒千人に付男四九六・九、女六〇五・七、平均五四七・一で、驚くべきは乳幼兒死亡率の高いと共に、女が男よりも遙に高い事である。三年の平均によるもこの傾向は同樣で男三〇二・四に對し女四二八・四で、女子は男子に對して四一%高い。かくの如く女子の幼兒死亡率の高いのは嬰兒殺の習慣少からず、然も嬰兒殺しは女子は男子よりも多いによる。本調査者に當つた陳氏は一ケ月に一回その地方を巡回する丈であるが。一回の巡視に於て多きは八件の嬰兒殺に遭遇したといつてゐる。もとより死亡率の高いのはそれよりも育兒に對する不注意による事は

いふ迄もない。

年齢別の死亡率を歐洲のそれと比較すれば驚くべき高い。

	西歐諸國	支那
一〇——一四歳	一・〇——一・五	一五・三
三五——四〇	五・〇——七・〇	二六・七
六五——七四	五〇・〇—六〇・〇	一〇三・三

年齢別死亡率に於ても二倍乃至十數倍であつて殊に幼兒に於て高い事が知られる。

更に之を貧富別にみるに千人當り死亡率富者三〇・九、中産者四〇・〇、貧者四七・三であつて、マルサスの積極的人口抑制が暴威をたくましくしてゐる事がわかる。蓋し衛生狀態に於ては貧者と富者との間には大して差のあるものと思はれない。チビス、コレラ等の危險に曝されて居る事に於ては貧者と富者の間に差別はない。從つて富者と貧者との間に五割以上の死亡率の差ある所以のものは食物の不足、住居の不良に基く疾病抵抗力の差に歸しなければならない。

六、自然增加

上記出生率と死亡率よりして出生率も又年によつて甚しき差のある事がわかる。之を表示すれば左の如くである。

	出生率	死亡率	自然增加率
第一年	四八・三	四二・七	五・六
第二年	四四・一	三六・一	八・〇
第三年	四〇	五二・〇	(減)一二・〇
平均	四四・二	四三・六	〇・六

トムソン「支那に於ける人口動態統計調査の經驗」

斯くの如く自然增加が年によつて差のある事は支那の人口狀態の特質である。一年二年若は數年間でも特に甚しい疾病、凶作がなければ、高率なる出産は高率なる人口の自然增加をもたらすが、一度强烈な傳染病や凶作が來れば忽ち之を浚つて行つてしまつて、結局に於て人口は殆んど增加しない。著者は第四年目の初期に於て死亡率低く出産率高く、千人に付二〇——二四人の自然增加をみて居るが、一人當りの耕地四分ノ一英町しかない之等の農民は、かゝる人口增加を扶養し得べくもなく、やがては飢饉か傳染病に浚はれてしまふ事と想像して本文の筆を擱いて居る。

以上の調査に對し筆者の批評を附加する必要もない。唯一言感想を述ぶれば、著書が最後の言葉に於て支那人の一人當り耕地が四分の一に足らざるを以つて、マルサスの法則に從つて餓死又は之に準ずべき疫病に依つて人口の自然增加は抑制せられると云つたが、我が日本の人口一人當りの耕地反別は實にこの支那人よりも狹いのである。而も今迄世界文明國中稀に見る人口の自然增加を示しつゝ、生活程度の向上をも實現して來た。今尙人口增殖を以つて國策の根本として居る。その差異は何處にあるか。この點を論ずる事は本紹介の範圍を逸脫するが故に、之を述ぶる事を差控へるが、日本國民はこの日本と支那との差異を明確に意識して努力する事を怠つてはならない。然らずんば日本の人口現象も亦支那の夫と選ぶなきに至るのである。(北岡壽逸)